

クローズアップ

NGO・NPO

社団法人

アジア協会アジア友の会(JAFS) ～アジアを一つに～

社団法人アジア協会アジア友の会(JAFS)は、インド、カンボジア、スリランカ、ネパール、フィリピン、バングラデシュなど、アジア一九カ国四一カ所に現地提携団体を持ち、国際協力やネットワーク事業を行う国際民間協力団体(NGO)です。今回はJAFSのさまざまな活動について、また、海外での活動として夏にスリランカで開催された国際NGO環境セミナー・ワークショップ現地取材の様様を紹介します。

JAFSの概要・設立のきっかけ

一九七二年、アジアの大地・自然・伝統文化・人々を愛し、ボランティア活動に関心のある仲間が集まりグループを結成。インド・ベンガル州を襲った大洪水の視察を機に「自分たちにできることはないか、民間レベルでの国際協力が必要だ」という思いがグループ内に高まり、「安全な飲料水」の確保こそが農村開発の基本であるという認識の下、一九七九年「アジアに井戸を贈る運動」としてアジア協会アジア友の会の活動をスタートさせるに至りました。創始者で現在事務局長である村上公彦氏は「一つなるアジアの実現を目指し、国境を越えた友情の輪を広げることが夢でした」と話します。こうして日本のNGOの草分け的存在として始まった活動は大きく広がり、一九八八年には社団法人となり、今年発足二七年になります。中央事務局を大阪に置き、現在の会員数は四一〇〇名。スタッフ七名で運営し、多

くのボランティアが活動に参加しています。

活動内容

基本理念に「どこに生まれても、生まれてきて良かったと思える地球社会の創造をめざして」を掲げ、「アジアの人々との理解と協力と連携」を目指し、それぞれの地域の実情に適した地元の人々自身の手による「自立」のプロジェクトを支援し、交流活動を行っています。井戸供給のほか、植林、教育、生活向上などのさまざまな自立開発事業、各国ボランティア団体の育成、国際交流活動(ワークキャンプ等)の推進、国際理解教育、地球の自然環境保全活動が主たる事業です。



↑パキスタン地震緊急支援で支援物資を送る様子

さらに、最近の災害により甚大な被害を受けたアジア地域に対し、緊急支援として被害地域の初動調査や募金活動なども行っています。

活動紹介

JAFSの原点・井戸供給事業

アジアには、安全で衛生的な水を確保できない多くの地域があります。JAFSではこのような地域に対し、安全な水「井戸」を贈る活動をしています。このような地域では、毎日の水くみは女性や子どもたちの仕事とされ、毎日数kmの道のりを往復しなければなりません。村に井戸ができると、この重労働から開放され、女性にはほかの仕事、子どもは学校に行く時間ができます。井戸の建設は、衛生、福祉、教育、経済性等の面で多くの改善を可能にし、人々は生活基盤を作り、自立への一歩を踏み出すことができるのです。JAFSでは二〇〇五年三月現在、二二カ国一〇八一基の建設を支援しました。また、二〇〇四年二月に発生したスマトラ沖地震大津波は多くの井戸を破壊し、被害を受けた地域にとって飲料水の確保は急務です。JAFSはすばやく現地提携団体と支援内容・方法の検討を行い、海水の混じった井戸水の浄化および新しい井戸の建設の支援を行っているところです。

グリーンスカウト運動

グリーンスカウトとは、GREEN(緑・環境)に対しSCOUT(行動する集団)の意

味で、環境問題に対する教育を行う活動です。参加者は幅広い年齢層に及び、現在まで九カ国二〇〇〇人を数えます。

今回は子どもを対象とした活動の一部を紹介します。

「土と水と緑の学校」：JAFSと新宮市などの共催で一九八四年以来、毎年八月に実施されている青少年自然環境教育プログラムです。日ごろ自然体験の少ない子どもたちが、この体験を通して地球の基本「土・水・緑」について学び、その役割や大切さに気付くこと、また、集団生活から規律やマナー、助け合いの精神を学ぶことが目的です。



↑土と水と緑の学校開校式

「グリーンスカウト大阪・吹田」：地域の清掃活動やキャンプを通して環境教育を行っています。河川の清掃を通して、「ゴミを不

快に感じること、自然に優しいエコロジカルなキャンプを通して自然を愛する心を養うことが目的です。

以上のような活動から、人と地球環境に対する思いやりと正しい環境認識を持つて行動できる次世代の子どもたちの育成を目指しています。また、この活動をアジア各国に伝え、他国との情報交換や協力の推進、また、広く一般への啓蒙を図る場として国際グリーンスカウト大会を二年に一度開催しています(この大会の模様については、後に紹介)。

今後の活動・課題

既存の活動をさらに強化することはもちろんのこと、運営面の課題として資金面の協力と多くのボランティアの協力を得るために、広報アピール等を検討し充実させ、活動の普及を図っていききたいということです。また、視野を広く持ち行動できる人材の育成という視点から取り組んでいる次の事業について紹介します。

「COGN (Children's Global Information Network)」：アジア各国の子どもたちが、お互いの違いを認め合う感覚を持つて育つことを実現するための取組み。例えば、「あなたは一日何ℓの水を使いますか?」という質問に、さまざまな国の子どもたちがHP上で回答し合う方法で行います。通信媒体の普及からこのような形の交流も可能となり、情報交換が簡単に行えます。このやり

とりを通し異なる回答があることを自然に認識し認め合い、互いの文化や環境の違いを理解できることです。

国際NGOセミナー・ワークショップ スリランカ(第四回国際グリーンスカウト大会)

二〇〇五年八月二九日から九月三日にかけて、スリランカ・ラトナプラという地域で行われた国際グリーンスカウト大会に同行したので、海外における活動内容と現地の様子をお伝えします。

この大会は、第一回を一九九九年にタイで開催し、今回で第四回を数えます。各国で活動を行う団体間の情報交換や交流、また、共同作業を通して学び合い活動を向上



↑第4回国際グリーンスカウト大会参加者たち(H17.8.29～H17.9.3)

させ、普及させることを目的として開催されるもので、今回の大会では、各国NGO団体のメンバー一〇〇名が参加し、五日間にわたる環境問題の講演会、現地の村で

のホームステイや植林作業、トレッキングなどを体験しました。日本からは、JAFSのスタッフと普段からJAFSでボランティア活動を行っている仲間たちが参加しました。各プログラムの内容を紹介します。

講演会：「生物の多種多様性に対し近代開発が今、どのように影響を与えているのか、その行きつく先は何だろうか」をテーマとしたコロンボ大学教授の講演では、スリランカが種々さまざまな生物が生息する世界有数の国であることや自然破壊の現状を学び、スリランカ、また、地球規模の抱える課題を考えていく過程においてグリーンスカウト運動の重要性を再認識しました。

各国の活動報告：現在取り組む活動内容、各地域での活動の成功例・失敗例を紹介し合い、お互いの経験や知恵を交換する場となりました。このセミナーの現地スリランカ協力団体は「サルボダヤ」というNGOですが、次にこの団体の活動内容、JAFSとの協力事業について紹介します。

●サルボダヤ

スリランカでは、多くのNGOが農村開発や福祉等の分野で政府と協力、補完し合い活動を行っています。サルボダヤは、基本理念を「個人・家族・コミュニティの覚醒を促す」と掲げ、農村開発、保健、教育、農業、地域産業等の分野にわたる活動はスリランカ全域に及びます。各地域で道路や井戸、学校、公民館などの建設を行う作業を通して農村というコミュニティを形成させ、結

束を強化し自立させる支援を行っています。JAFSはこの農村自立開発育成部門の運営費用を支援しており、協力事業としても井戸建設、植林、グリーンスカウト運動、スマトラ島沖大地震インド洋大津波災害復興事業などがあります。

現地の村の人との交流：サルボダヤの自立支援を受けている現地の村で、ホームステイ・植林作業・トレッキングを体験しました。言葉が全く通じない中で、どうコミュニケーションをとるのだろうかという不安でしたが、子どもたちの笑顔と自然の雄大さはこれを超えるものでした。満天の星空と流れ星、トレッキングで登った山から眺めた見渡す限りの大自然を前にして、森林破壊の現状、地球温暖化がもたらす影響を想像すると、将来もこの光景が見られるための努力を継続的に行うことが必要であろうと感じました。

各国文化交流会：参加者それぞれが民族衣装の披露、伝統的な踊りや歌を通して自国文化を紹介し交流を行いました。われわれ日本からの参加者は法被にねじりはちまき姿で、ソーラン節を披露し、自国の文化を伝える大切さを感じた時間になりました。

現地学校訪問：Eoras学園という高校を訪問し、自転車の贈呈式を行いました。これは、アジアの各国の学校に自転車を送付するという、大阪府が放置自転車の有効活用から取り組む事業の一環として行われたもので、この現地の学校とのコーディネートはJAFSが行い、この学校には一〇〇台を

(社団法人) アジア協会アジア友の会

〒550-0002 大阪府大阪市西区江戸堀 1-2-16 山下ビル 4F TEL 06-6444-0587 FAX 06-6444-0581

E-mail: asia@jafs.or.jp URL: http://www.jafs.or.jp

開催地スリランカの紹介

私が抱いていたイメージは、紅茶、野生の象、スリジャヤワルデネプラコッテという長い名前の首都くらいでした。発展しているのかそうでないのか？やはり三食カレーなの？と、こういう機会がなければ気軽に訪れる地ではなく、未知の世界を知ることになり期待が膨らみました。

スリランカは、インド洋の真珠といわれ、インドの南東に位置する緑豊かな国です。面積は北海道より一回り小さいくらいで、東京からは直行便九時間でコロンボ空港に到着できます。公用語はシンハラ語（こんにちは）とタミル語で、英語も通じます。多



↑Horana学園にて、生徒たちに自転車を持呈する様子

民族国家であり、数年前までは民族紛争が続いていましたが二〇〇二年に停戦合意がなされています。今回のツアーではこのスリランカの生活事情を体験することができましたのでいくつか紹介します。

まず、電気事情が悪いということ。旅の必需品に懐中電灯と記されていたとおり、数分おきに電氣は消えてしましますが、現地の人は慣れているのか気にしていないようでした。次に食事はやはり三食カレーでした。といつてもいわゆる日本のカレーライスとは別物で、肉・魚・豆などをペースト状あるいはスープ状に煮込んだものをばらばらのライスと手で器用に混ぜ合わせ食べます。はじめはスプーンを使っていたみんなも慣れてきて手で混ぜ合わせていたでいたっていました。また、食後は紅茶を飲みます。スリランカは世界有数の紅茶生産国であり、毎日何度となく飲みますが、大量の砂糖とミルクを入れるので甘さが半端ではありません。香辛料の効いたとても辛いカレーにとっても甘いミルクティーは、不思議な味覚でした。

ツアーの成果・目指すもの

JAFSの国際ワークキャンプ・スタディツアーは、アジア各国で活動する仲間や現地の人々との交流、井戸掘りや植林などの共同作業を通じて心と文化の交流を目指して毎年数回さまざまな国で開催されています。このようにアジアに直接触れる機会や場が用意され、旅行ではできない体験がで

きること、出会った仲間とのネットワークを広げることがこの取組みの大きな魅力といえます。「出会った仲間とのネットワークを今後の活動に活かしたい」「この活動は継続がとても大切であり、人材を育成することが重要であると感じた」「参加前後の気持ちの変化を感じ、今後の活動をもう一度考えるきっかけになった」というのが参加者の感想です。参加者それぞれが学び刺激を受け、今後の活動を充実させる源を得ることができたツアーだったといえます。

おわりに

JAFSは広い視野を持つ人材育成を活動の目的の一つとしていますが、今回の体験は私にとっても視野を広げる体験となり、とても貴重なものになりました。国際協力の現場を自分自身の目で見ることで充実感を感じた人々と実際に接することで充実感を感じられた体験でした。また、短い期間でしたがスリランカの暮らしを体験し状況を知り、もつと世界に目を向けること、必要とされる支援・協力を最善の方法で行うことをお互いが考えなければならぬと感じました。

参加者の皆さまにはこの体験を今後の活動に生かすこと、JAFSにはそれを生かす場としての持続的な活動を期待したいと思います。

(財)自治体国際化協会

支援協力部地域支援課

主事 川田 裕子（鳥取県派遣）